

部 長	長谷川 裕城
研究主任	大槻 直矢
部 員 数	9 名

1 研究主題

子どもたちの関わり合いを重視し、基礎基本の定着を図った書の指導

2 はじめに

基礎基本の定着のために書の授業の習慣化、相互評価の定着など年間を通して、書の学びに向かえるように、その方法や効果について授業研究を行った。小牧の「学び合い」の体系を書の授業にも取り入れようと「風車の隊形」による授業展開なども取り入れてきたが、コロナ禍にも対応できるよう、タブレットを活用した相互評価の方法や、本時のねらいの共有など、新たな方法についても実践、研究を行った。

3 研究経過

- 4 月 研究主題・研究組織の決定・年間計画
- 5 月 実践計画
- 6 月 実践交流 1
- 7 月 実践交流 2
- 9 月 実践交流 3
- 10 月 中間発表・研究発表会準備
- 11 月 実践交流 5
- 2 月 本年度のまとめ

4 研究の概要

書写の授業での子どもたち一人ひとりが基準となる字形を見て文字を書き、各々が技量を高めるといった授業形態から、子どもたちの関わり合いを通して基礎基本を身につけさせることはできないだろうかという考えのもと、研究主題を定め、実践交流を行ってきた。

(1) 基準となる字形との向き合いかた

研究会の中で、生徒がお手本を見ている時間が少ない、お手本と自分の作品を見比べないなどの問題点が挙げられた。また、小学校低学年の実践では鉛筆の持ち方の指導や、書いた文字の修正に時間がかかってしまうなど、字形に向かう段階までなかなかいけないなどの話も挙げられた。そこで、字形を意識させる授業ではタブレット端末にお手

本を送り、そのお手本を指でなぞり書きするという手法をとった。鉛筆の持ち方にまだ慣れていない児童なども指でのなぞり書きならば抵抗も少なく何度もなぞり書きをすることができた。また簡単に修正を行うことができる点も児童にとって取り組みやすい要因のひとつとなっていた。

(2) 共有と相互評価

タブレット端末の学習支援ツール（ロイロノート）を通じて書いた文字を提出し、正しく書けている級友を紹介するなどして、ペアや全体で相互評価を行った。これによって、自分では気付かなかった文字の間違いに気付いたり、級友から基準となる字形に近づけるためのヒントをもらったりしている児童も見られた。

(3) 気をつけるポイントを意識して書く

中学校での実践になると、タブレット端末上のお手本や級友の作品に直接アドバイスを書き込む姿がみられた。また自分でタブレットの画面上で基準となる字形との比較を行い、その違いを記入し、練習に活かすなど、自分の課題をその時間中にみつけ、書き取りに向かっていた。相互に考えたことを見合うことで自分とは違った見方で基準となる字形に近づけるためのアプローチの仕方を生徒間で共有し合う姿が印象的だった。

(4) 書の授業の多様化

今回は繰り返し何度も字形を確かめられること、共有ができること、記録ができることなどのメリットからタブレット端末を書写の授業で活用した。タブレット端末はもちろんのこと、課題や目的によって活用する道具は工夫していく必要があると感じている。また、生徒自身が墨と筆を使うのか、水書で練習してから本書きに向かうのかなど、使用する道具を選択し技術の向上にむかっていくのも必要なことだと、研修会の講師の先生からお話をいただいた。

(5) 全体を通して

なぞり書きの反復練習や、文字の比較にタブレットを用いたことによって、基準となる字形に向き合う時間が増え、自分の文字の修正点に気付きやすくなり、より正しく整った文字を書こうという意欲が高まった。また、級友と学ぶことで新たな課題や、解決方法がより明確になり、上達を実感する場面が見られた。

5 今後の課題

今回の実践交流では、一定の成果がみられた。ただし、今回のやり方では、まとめ書きの時間が減るなどの課題もある。今後はそういった面の改善も踏まえて研究を進めていく。